

$\textcircled{\text{II}} 1040 - \frac{1}{2}$
 $\textcircled{\text{III}} 1358 - \frac{5}{1}$

① 1128' 74 太廟

小町 45^下

小町 735^下
取寄 181 電灯
① 1300^下

小林 82^下 五等 和
候は 思 字

1.160 P-2/4
ようであ 版 13 行

ともあれ

小町 56^下 新 旧 北 地

水経注 穀水条には、後漢代の洛陽十二

を見てみよう。

洛陽十二門の管掌体制は

門侯 (衛門府)

*

が異なっていたようである。

十三の宮城門といい、北宮・南宮の位
置といい、北魏時代の洛陽城は、西晋時
代以前の洛陽城と較べれば、幾分、おもむき

は一つの牆壁があつて、この内に北宮・南宮
の二宮置かれていたろう、というわけであ
る。
つまり、北魏時代の洛陽城内の北垣寄りに
一つの牆壁があつて、この内に北宮・南宮
の二宮置かれていたろう、というわけであ
る。
と、いいかと思うし
という見解がある、(「中国の帝都」村田治郎、
綜芸舎、八五頁)

① 1160^下
2行 百餘
「洛陽」とある
小町 45^下
新 旧 北 地

小野 45P
③ 1300
天武
改行

1,160P - 3/4

洛陽から北に後漢の初代皇帝 新武帝 240' 石 1588' 洛陽から北に 312' 洛陽から北に 1133' 洛陽から北に 312' 洛陽から北に 324'

門にツいて、この記さしいる。洛陽に十二門があり、門ごとに侯一人をおいた。禄高は六百石、とリッている。東觀漢記にハッぎのようという。邳惲は上東門侯となつた。後漢初代の光武帝がハッて城外に出て夜かえつてきたとき、詔によつて門（東面北頭の上東門）を開かせ入ろうとし、上は門の間から顔を見せてわからせようとし、た。ところか邳惲は火の光が遠いのでよくわからなかつた。こゝによつて上はますますこの人を重用するようになった。とある。つまり、後漢時代には「洛陽十二門の門ごとに、侯一人を置いた」という。あるいは、この制度は、曹魏の時代へと引き継がれたことであつたらうか。

③ 1158' 洛陽から北に 312' 洛陽から北に 324'

三國志

洛陽から北に 312' 洛陽から北に 324'

禪讓^{ぜんじやう}になつて表面上^{ひやうめんじやう}平和^{へいかわ}のうちに後漢^{ごかん}
 から王朝^{おうちやう}を譲^{やう}り受^うけた魏^ぎ（曹魏^{そうぎ}）の時代に
 陽^{やう}十二門^{じふにもん}の門^{もん}ごとくに侯^{こう}一人^{ひとり}を置^おいていたので
 あらう。
 一方^{いつぱう}、佐伯^{さへき}有清^{ありきよ}博士^{はくし}は、往古^{おうこ}の我が国^{わがくに}の
 宮城^{きやうじやう}十二門^{じふにもん}と、それぞれ^{それぞれ}の門^{もん}を警固^{けいこ}した
 十二^{じふに}の氏族^{しよくぞく}についで、
 十二^{じふに}の門^{もん}に名^なを残^{のこ}した氏族^{しよくぞく}がその門^{もん}を警固^{けいこ}
 したことは古い伝統^{でんとう}にもとづくもので、それ
 らは軍事的^{ぐんじ}膳部^{ぜんぶ}的^{てき}職掌^{しやくしやう}をもつて古^{ふる}くから天皇^{てんかう}
 に近侍^{きんせい}した氏族^{しよくぞく}であつた。
 と論証^{ろんしやう}したのだつた。（『日本書紀』下）日本
 古典文学大系、岩波書店、五六六―七頁参照

日本における
宮城十二門
の名と、
それぞ

第 〇 表
日本の門号と氏族名

猪使門	海犬養門	佐伯氏	玉手氏	多治比氏	伊福部氏	達部門	若大養門	伊福部氏	山門	吳大養門	弘仁式
倭鑿門	安盛門	談天門	談天門	達智門	般富門	郁芳門	皇嘉門	侍賢門	陽明門	延喜式	
倭鑿門	海大甘氏	佐伯氏	玉手氏	丹治比氏	伊福部氏	達部門	若大養氏	建部氏	山氏(小部氏)	拾芥抄	
猪使氏	海大養氏	佐伯氏	玉手氏	伊福部氏	伊福部氏	作氏(天伴氏)	氏	王生氏	或書云	門号起事	

(演員) 擴大

1,161^p-3/2
156G 第23表 日本の門号と氏族名

・右頁の右上(1/4頁)に、コ47
大きく掲載下さい。

猪使門	海犬養門	佐伯門	玉手門	多治比門	伊福部門	若犬養門	達部門	大伴門	壬生門	山門	泉犬養門	弘仁式 こうにんしき
偉鑒門	安嘉門	藻壁門	談天門	達智門	殷富門	皇嘉門	郁芳門	朱雀門	美福門	待賢門	陽明門	延喜式 えんきしき
偉鑒門	安嘉門	藻壁門	談天門	達智門	殷富門		郁芳門		美福門	待賢門	陽明門	
猪使氏	海犬甘氏	佐伯氏	玉手氏	丹治比氏	伊福部氏		達部氏		壬生氏	山氏	若犬甘氏	拾芥抄 しゅうかいしょう 或書云
猪養氏	海犬養氏	佐伯氏	玉手氏	丹治比氏	伊福部氏	若犬養氏	的氏	伴氏(大伴氏)	壬生氏	建部氏	山氏(山部氏)	門号起事

トル

トル

←※この欄トル

701年~819年

905年~

「小門」2/63^p下13^pルビ無

由1155^p洛陽宮抄門名一覧表

136G 『日本書紀』(下) 日本古典文学大系、岩波書店、補注24-6参照。

小叶 27 下 3 行 利益城

H18(2006)10.28(土)④

H30(2018)2.24(土)~28(4回)

H30(2018)12.20(木)~22(3回)

令和元(2019)5.20(月)~5.21(3回)

令和元(2019)12.12(日)~12.25(4回)

令和2(2020)8.28(金)~9.1(4回)

9/1 IF 8/30
8/29

1.162^P - 2/2

紀下262^P
ヤケヒのつかけ

衛門府 ④ 1160

1/2
16行

2733^P

皇極紀四年六月条に、

中大兄、衛門府に戒めて、

一時に俱に十

二の通門をさしかためて、往來はしめず

とあり、これが衛門府の初出記事である。(「日

本書紀」(下) 日本古典文学大系、岩波書店、二六

二頁注ハ参照)

*

★小林 434 (大カマ 974) ⑤1103^{P-1/2} 地図

千金渠 水経注 304^P 291^上を
⑤1057^{P-1/2} の図

⑤1349

1.163^{P-1/2}

改行

改行

例え

修

渠 (水を引くみぞ) に

曹魏は文帝・明帝のころ、洛陽城内の宮
殿・園池・樓觀の経営に多大の財力を費やし
てゐるが、土木工事においても立派なものを
残した。
穀水の上流(宮城西面の閶闔城門外七里よ
りかなり西方)に千金堰を築いたことも、そ
の偉大な土木事業の一つといえよう。(以下
巻頭の第9・11図、第4図へ千金渠を参照)
の項において掲載の、第4図および
図を参照しながら読んでいた方がよい。
穀水は西の方から東の洛陽へ向かつて流れてゐる。
洛陽の午前(西方)に曹魏以前から一つの堰
が有ったといひ、この堰を修理して造つ
たのが千金堰である。穀水があふ
れ、洛陽の街が水びたになるのを防ぐ為
に修築したのだ。旧来の堰を
洛陽記によると、千金渠の堰であり、曹魏の世にこ
の堰が修理されて千金堰といひ、水をせき止める
た。石を積んで堰となし、水をせき止め、その

大カマ 285^P

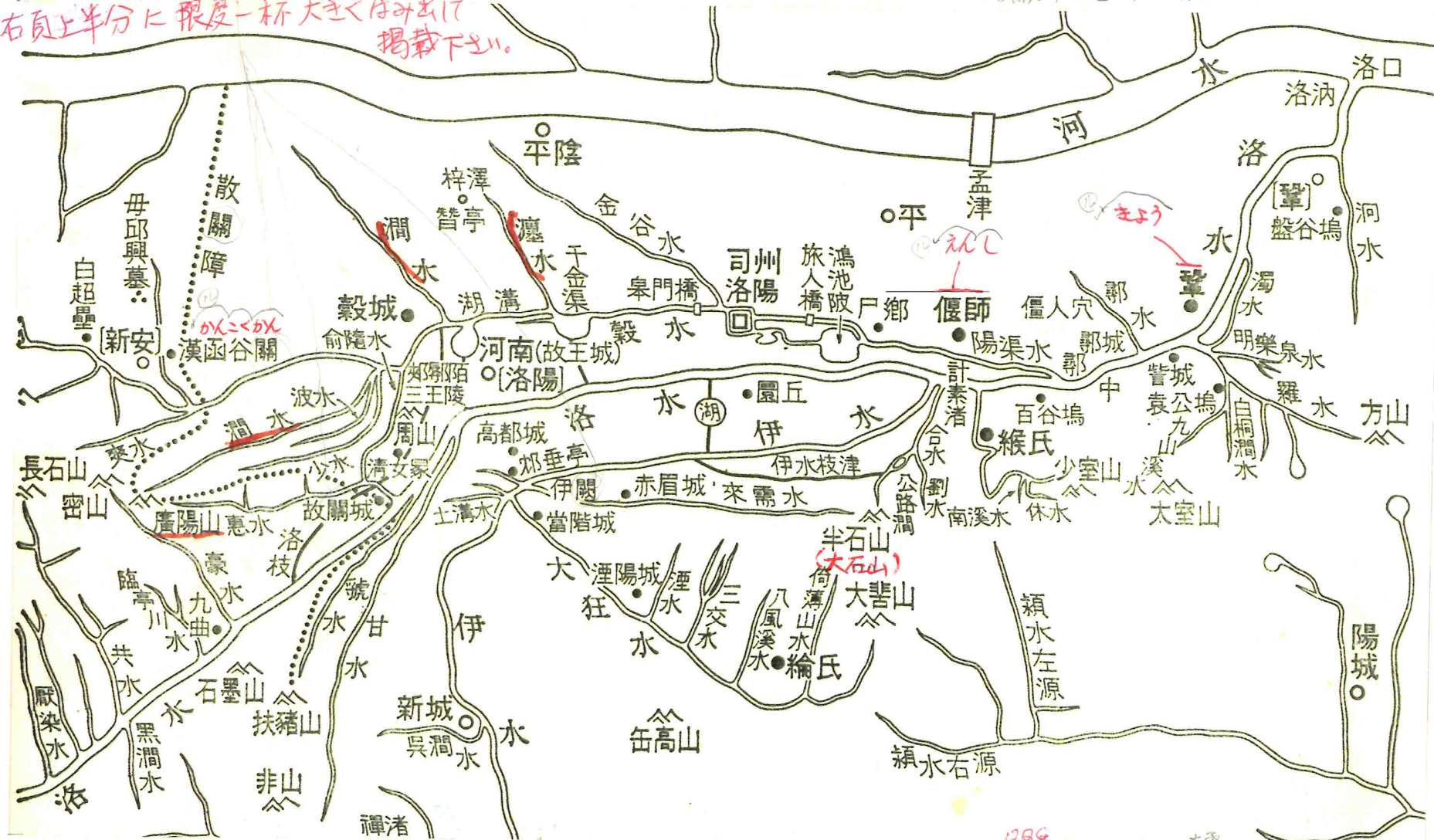
大カマ 1235^P

大カマ 248^P

大カマ 632^P

大カマ 688^P

命隨水 郊郭陌 1163 P-2/2
 えん(1306 64 大石山 1184 1/2 洛陽カラニ 301 下 半石山=大石山
 きょう 1104 19 1/2 大石山
 * アンダーライン (4本) トル
 * 右頁上半分に 限度一杯大きくはみ出して 掲載下さい。



1306 1406 第239回 洛陽近傍の河川 (北魏) 酈道元の「水経注」40巻による。
 『洛陽伽藍記・水経注』中国古典文学大系 (21) 平凡社、286頁の地図参照。

洛陽伽藍記 86¹

せ
こ
れ
を
溶
水
へ
流
す
よう
に
た
。

石橋

橋(張分橋)と呼ぶようになった

という。

また、

いわゆる千金堰は、この長分橋の、より

西側に有った

という。(「古代中国の都市とその周辺」ミ

ネルヴァ書房、二四〇頁、二二六頁参照)

すなわち

曹魏時代当時、穀水は西の方から東流

し、千金堰を経て、洛陽外郭城の内側(いわゆる

最外

洛陽城下)へ入り、宮城のまわりをぐるりと取

り囲むように流水、建春門(東面北頭門)

あたりから東方へ流水下つていった。

しかし、穀水の流水は急湓で、一は

は城下(宮城の外)つまり最外外郭城内)にまで

流水込み、多くの民家を壊す状態であつたの

で、その対策として、西晋時代以下

長分橋を作った

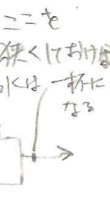
と解すことが出来るようである。

こうして、西晋以後、穀水の分流張方橋

大町1379
11林
5934ヨウ

張方橋

張方橋
①1166^P 10行



「巻」た水」とおろかして

北魏洛陽の社会と文化 48の図左

1,165^{P-2/2} 1057^{P-3/2} 1167^{P-3/2} 1940^{P-3/2} 北魏代に ①1167^P 流水を築き 新
 前末にうけ ↓

分少なくなくなったと思われ。 外郭城（内）が茨水の被害を蒙る頻度はすい
 で二つに分割することによって洛陽城最
 外郭城（内）が茨水の被害を蒙る頻度はすい
 分少なくなくなったと思われ。

米

大蔵印 2021

二 顧 参 照

主 小林 1064
河内 1173-1/2 177

古代中国の都 240
洛陽 86P

1164 軒

1165-1/2 20 軒
1.166 P

1162 P

新刊 91頁に
長分橋

もつとも、この長分橋については別伝がある

西晋の河間王 **司馬** 顥が長安に

居たとき、張方を遣わして長沙王を征伐した際

張方がこの場所に軍営を置いたので、因って名づけて

張方橋と呼んだ

ともいう。(「晋書」卷五十、河間王顥伝、ならびに卷六十、張方伝)

このように、長分橋は張方橋とも呼ばれる

が、そのどちらが正しいかは、はっきりしない。

「古代中国の都市とその周辺」服部克彦、ミネルヴァ書房、二四〇頁参照

ともあれ、この長分橋(張方橋)において分疏さ

れた張方溝(張方溝)は、洛陽城外郭(最

外外郭城)の西壁外面に沿って真直ぐ南流し、洛

水へ注ぐ

わけであって、すなわち西晋時代には、この洛陽

城外壁(最外外郭城)が存在していたことを示唆しているように思われる。

一面、参考までに記せば、従来の

水害 洛陽がラニ記 310P上5行
大カワ 1601' 1035' 河南郡の河南県 洛陽にあり
積 各階からラニ記 310' 末
乗 1164' 改行

長分橋 1164' 1940' - 1/2 末

1063' - 1/2 末 20' 南北15' 114

北魏時代に初めて宮城（九七城）を中心として、その外周に外郭城（東西二十里、南北十五里の城壁）が築かれたのであろうと考える。 （既述）

西晋時代となった時、最外郭城の無い郊外に張方溝が掘られ、北魏時代に至った時、九七城の西面（宮城の中心から西へ三里の西面）を出て西へ七里のところに南流している張方溝が、東西二十里の洛陽外郭城の西の限りをなすようになった。 最外

というわけになっている。 検討が必要であらうと思われる。

ところが、曹魏時代の千金堰はやかて壊れてしまった。 そこで、北魏時代当時西方に位置する河南城の北の石碕の西に、北へ向かって渠（水を引くみぞ）を開き、東へ下して、旧瀆（みぞ）（みぞ）に合わせたという。（第11図） 水経注に穀水条に「洛陽伽藍記・水経注」中国古典文学大系、平凡社、三〇九頁、三六三頁の図、北魏洛陽の社会と文化、服部克久、ミネルヴァ書房、四八頁の図を参照。

水害が起らないように工夫されたのであろう。

（*）より一層

巻頭の第11図を参照

大カワ 1398' 1398' 1398'

1163' 1163' 1163' 309' 386'

1165' 1165' 1165'

采然

1.168¹ - 1/2
1028¹

1.168¹ - 1/2

1063¹ - 1/2

1065¹
1067¹
1066¹ - 1/2

1066¹ - 1/2

金カ
ネン

市1
499¹

大オ
ホ

馬
2478¹

平
726¹

乗
1198¹

38
1314¹

陽
2367¹

市場

先に少々ふれたが、洛陽において営まれた

市場の配置について、もう少し詳しく見てみ

よう、第十四章へ洛陽の都の郭城山（最外外

郭城）の項において概略のみ既述）

洛陽には、金市（大市ともいう）馬市（平

馬市と称した）洛陽市（洛陽県市）

とありうの三つがあったという。（「洛陽

伽藍記・水経注」中国古典文学大系（21）平凡社

一五頁、二九頁注一〇二、四八頁注二五、三

一〇頁、他参照）

ところが、これら三つの市場のうち、金市

（大市）の場所が、もうひとつ定かでない。

*金市は、洛陽の宮城内にあったようであ

り、宮城外にあったようでもあって、

判然としないのである。

ではここに、中国の諸文献を見てみる。

くしよう。

*

洛陽がうた 310P下
堅(るい)とて一広 2335P
古代中口の都とその周辺
(235~236 234P)

中朝 1444P
洛陽がうた 15P

1.168P-2/2

1358P-4/

(北魏)西陽門 1155P 西陽門(魏、晋)
古代中口の都とその周辺 234P
洛陽がうたに 15P 48P 383P 延年里

(2)は、次々頁179

• なお、洛陽宮城西北隅の金墉城を含む防塁

とある。

た洛陽壘に對する

洛陽壘に對する

記に、
陵雲台西有金市、金市北對洛陽壘

水経注に穀水条に引用されている洛陽

と記されている。

ときに金市があつた處である

晋の中朝(晋が洛陽を都としていた時期)の

と呼ばれる所で

そこがすなわち

一里のとらに有つた亦ここは日延年里に

二番目の門ある西陽門の内御道の北

北魏時代の長秋寺は宮城西面、南から

是晋中朝時金市處し

洛陽伽藍記に卷一、長秋寺の条に、

在西陽門内御道北一里。亦在延年里、即

献

金市が宮城内にあつたことを思ひせる文

金市が宮城内にあつたことを思ひせる文

金市が宮城内にあつたことを思ひせる文

金市が宮城内にあつたことを思ひせる文

金市が宮城内にあつたことを思ひせる文

大口
499
イ
エ
ウ

元付 2208P
 文芸 (おせん)
 大のつ 390'
 養世也 (吉) 1065

1169^P - 1/2 大カサ

同文 p
④ 1324-2/2

古代中国の都は、中国の帝都 59P
 ① 234P
 ② 1324P
 ③ 1126P 9年

域か、洛陽壘と呼ばれた、という。(後述)
 宋敏求の『河南志』二〇卷に基づき
 それに金・元のことを元代の人が書き加えた
 『元河南志』卷二の条に、
 「一説三市謂平樂市、金市、馬市也。金市
 在陵雲台西、北対洛陽壘」とある。
 「古代中国の都市とその周辺」服
 部克彦、ミネルヴァ書房、二三四頁。「中国
 の帝都」村田治郎、綜芸舎、五九頁、並七参照
 合)の西へ、そして洛陽壘の南に在った
 といふ意味であらうか。
 梁(五〇二―五五七)の昭明太子
 によつて撰された『文選』卷十の播岳閑居
 賦に出てくる「陪京近伊、面郊後市」の二
 うで、李善が注に陸機の『洛陽記』を引用し
 ており、そこには、(西晋の文人)
 「陸機洛陽記曰。洛陽凡三市。大市名曰金
 市。在臨商觀之西。(臨商觀宮中觀名在宮之西)
 馬市在大城之東。洛陽市在大城南」と記され
 ている。

北宋中期の人。一〇九七—一〇七九

こと 11 は 前 2 頁

1.169^P-3/2

あきひえ^P 20 商

古代中国の都市と... 235^P
洛陽が「城中」48^P
⑤ 131^P-1/3

あきひえ^P 332^P
凡 観 483^P

洛陽市には凡そ三市があり、^{13.5 94} 中市・馬市・³³² 南市。
洛陽市と称されてゐた。中市はまた金市とも
いふ。城内中央宮闕の西に位置する臨商観
(商を監視する為の高殿の西側)の西側の
地(城中)に在り、馬市は大城の東に在り、
洛陽市は大城の南に在った。
と云ふことのある。(「古代中国の都
市とその周辺」服部克彦、ミネルヴァ書房、
二二七と八頁、二三四と五頁。「洛陽伽藍記
水経注」中国古典文学大系(2)平凡社、四八頁
注二五参照)
三市のうち、城内に在ったのは金
市(中市)のみで、馬市と洛陽市とは城外の
東に在ったと述べられている。
米
② 中市(別名金市)が宮城外にあつたこと
を思わせる文献
太平寰宇記の引用では、中市の位置に
宋の契丹が援した地理書

東洋史
113^P

①1174-1/3 から移す
 ①1161-2/2
 ①1066-1/2
 ①1054の図
 ①1170-1/2
 ①1065-2/2
 ①1065-2/2 宋960~1279年

大城の西南にあり
 と記されていり。ハ「洛陽伽藍記・水
 経注」中国古典文学大系、21、平凡社
 四八頁、注二五参照）
 太平御覧（九八三年撰）百九十一、引
 用の洛陽記に、
 「金市在大城西。又云」按金市在臨商觀
 西、兌爲金、故曰金市」
 とある。ハ「古代中国の都市とその周辺」服
 部克彦、ミネルヴァ書房、二三四頁参照）
 このように、金市（別名大市）は、
 宮城内にあったのか、あるいは宮城
 外にあったのか、定かでない。第○図、第○
 しかし、あえて次のような経過を想定してみたい
 周公旦により、洛邑を囲む成周が築かれ、
 日周礼の「前朝後市」の理想通りに、洛
 邑の外郭城（都城）内に支配者達の為の二つ
 の市場が設けられ、
 早くて同じく「前朝後市」の思想通りに、
 成周（最外外郭城）内に一般庶人の為の二つ

の市場が置かれたのであろう。
 ①1174-1/3 から移す
 ①1161-2/2
 ①1066-1/2
 ①1054の図
 ①1170-1/2
 ①1065-2/2
 ①1065-2/2 宋960~1279年

①1174¹/₃から移す 因みに①1161²/₂
 ④9¹/₄第6回 山林308¹/₂ 参考迄に①1174²/₃

1170¹/₂

版 ①1066¹/₂
 ①1072¹/₂ 周礼
 ①1072¹/₂ 周礼
 ①1072¹/₂ 周礼
 ①1072¹/₂ 周礼

前頁7行
 前頁7行
 前頁7行
 前頁7行

市山と称されたのたう。
 水洛邑(宮城)内に設けた市場が、
 宮市(参考)と
 と呼んだ。漢和辞典に小林信明で小学館
 昔、宮中に設けた市場
 水なお因みに述べると、
 の市場が置かれたのではなかうか。
 成周(最外郭城)内に一般庶人の為の二つ
 (口)の市場が設けられたことたう。
 邑の外郭城(宮城)内に支配者達の為の二つ
 周礼(前朝後市)の理想通り
 みた。卷頭の第6の11回参照。一部重複
 混雑と定かでない。経過を規定して
 一かあえて次のような経過を規定して
 (1)宮城内にあつたのか、
 (2)宮城の西南にあつたのか、
 (3)宮城の西方にあつたのか、

「かま
構え」
理解(たぐ)

④ 1125
74 1516^p

狭小 571^p

⑤ $1125^{p^p} \sim 6^{p^p}$

$$1.171^P - \frac{1}{2}$$

名邦治陽
④1094P
あふあ1096未3行

てせす 云
手狭
称護 1092ⁿ

1078^d

④ $1041 \frac{1}{2}$ の6倍は6246
新(1) $\frac{1}{2}$ 頁
小町 41 頁

周第二十六代 宣王の宮城（参考）

春秋時代の敬王の時に、洛邑に成周（最外外郭城）の修復工事が行われた。

そして引き続き王城（後の北宮）の南に南宫が築城されたように思われる。

（巻頭の第4表参照）

宮城内の北宮および南宫の広大な宮城域内に、豪華な数多くの殿舎が次々と建て増され、この都は洛陽と改名された。

その華やかな都は、戦国時代の人々があこがれやまないうところであった。

都は、名都洛陽と称讃された。

前漢の頃にはすでに、北宮と南宫が三つの複道で結ばれていた。

こうして宮城内の大部分は、北宮、南宫、および三つの複道で占められたと考えられる。

したがって、それ以外の狭小な宮城域内に邸宅の所有者を許された貴人（高官）達は、いよいよ少数となっていったのであろう。

その結果、宮城内の貴人達の居住区

牛馬市 洛陽カラン 36 馬市 1338 洛陽カラン 36 馬市での大判 明 1171^P - 2/2
 262年 洛陽カラン 36 馬市 1338 洛陽カラン 36 馬市での大判 明 1171^P - 2/2
 1173^D 詳細 1065^R 1/2 小 1754^D 9 因 草 魏

陽市 かし、北魏の時代となった時、宮城内外に
 の為の三つの市場（大市・洛陽市・馬市）
 があり、一方、最外郭城内に一般庶民
 西寄りの方に高宮達（高宮）の為の一つの市場（金市）
 と考え、晋の中朝に至るまでは、宮城内の
 曹魏時代から
 後漢代までは存在していた
 不明瞭なこの物語では
 宮城内の東の市場が、宮城東壁の外側へ
 移されて、馬市と呼ばれた
 曹魏の時代に、建春門外に馬市が
 洛陽伽藍記によると、
 移されたのかも知れない。
 廃止されたのでなく、宮城東壁の外側へ
 だけが残されたのであろうと観察される。
 川や、もしかしたら、宮城内の東の市場は
 側にあった市場が廃され、西の市場（金市）
 一つ、一つの頃か定かでないが、東
 に二つの市場を置いておく必要がなくなる

小 383^D
 性 88^D

晋の中朝
洛陽から二記15²² 相要1281² 立ち並ぶ1378²
1281² 1292²

1170⁰ 1172^P

数多くの寺が建立されていた。(「洛陽

伽藍記・水経注に平仄社、三八三頁参照)

・つまり、宮城内の高官達の居住区域にも、

杜大な寺々が築造されたようである。

・とすれば、北魏時代の洛陽宮城中に住む高

官達の人口は、さらに少なくなってしまうたに

相違ない。

・そこで、宮城内に市場を置いておく必

要性が全く薄らいでしまったと考えられる。

・また、宮城内に市場があるというのも、考

えてみれば少々奇妙なものである。

・こうしたわけで、晋の中朝の頃にはまだ存

在していた宮城内西寄りの地の「金市」が、

北魏の時には廃止されてしまったのであろう。

・また、大城の西南にあった大市が、宮

城西壁の外側へ移されたように推察される。

⑧ すなわち、城東に「洛陽山」「曹魏の時の馬

市」が、城南に「洛陽市」、城西に「大市」が

置かれたのであろう、と思われる。

⑨ ところが、昔の金市に言い得ぬ親しみを持

つ人々が、大市を別名「金市」とも呼んだ

城西の

1170⁰ 1172^P

を覚えて

第238回 北魏洛陽伽藍図

まよりニ
 大の郷里(むらと) 2343' 村里、開港(むらと)
 郷邑(むらと) 1018' 村里、村民
 大の 北魏洛陽の社会と文化 144'

大の陰陽五行説

(二)

1,173-1/2

北魏洛陽の社会と文化 144'

ミネルヴァ書房、一四四一五頁参照
 という。(「北魏洛陽の社会と文化」服部克彦
 民街を形成していた。云々
 里(郷里)に水を取り囲むように
 大市は、固圉八里、つまり二里四方の大市場
 在(あ)った。城西地域全体からみて、ほぼ中央に存
 位置(ち)した。西陽門の西側に四里、御道の南側に
 洛陽の大市は、宮城西面の南から二番目
 10 北魏時代に宮城の西方で経営されて
 大系、平凡社、二九頁、注一〇ニ他参照
 洛陽伽藍記・水経注に中国古典文学
 金市と称したの()ろう、とりわけて
 物(もの)は陽(よう) (木・火) 陰(いん) (金・水) 中(ちゅう)間(かん) (土) 万(ばん)
 属(ぞく)してゐるとする古代中国の哲理(てうり)に当(あ)て
 た()と想像(さく)される。陰陽五行説(いんようごぎやうせう) 一切(いっさい)の万(ばん)
 ため、後代(こうだい)へ大(おほ)いに混乱(こんらん)することにな

1.173 $\frac{P_2}{2}$ 中 10231

すなわち、
 (おおいち ひう)
 大市の広さは、周囲八里、二里四方であつた。
 ということが分かる。(巻頭の第11図参照)
 と称するようになつたのであろう、といわ
 る。(洛陽伽藍記水經注「平氏社、二九頁参照」)
 (中国古史文庫大系) 注二

では、曹魏時代の市はどのようなように配されたか

いたのだらうか。
洛陽伽藍記第二卷（城東）、建春門外の崇
真寺の条には、——かつての曰魏の時の馬市
について、次のように記されてゐる。

東石橋にひがしはし着く。橋は南北なんぼくに通つうじており、晋しんの

太康元年（二八〇）に造られたものである。

橋の南は魏の時の馬市があつた所で、嵯
 衡の北の大道の西に

て、^{たむ 2281}里内^{りない}に^{③1166}河間^{かかん}の^{たむ 248}劉宣明^{りゅうせんめい}の邸^{てい}が^ああ^たた^しと^{りう}りう。

● つまり、宮城東面北端の建春門外に、曹魏

④1000²-1/2

小林 308^P また参考

④1170¹ 木後す ④1161²-1/2

④1057²-1/2 図

1554²-1/2

1,174^P

中朝 洛陽ガランを15^P

西明門 ④1155² 1169² 西陽門

ス 460^P

洛陽ガランに 313²

古代中国の都市-同図 227^P

*

また、口水経注に穀水条には、
「建春門東、陽渠水南即馬市、舊洛陽有三
市、斯其一也」
と記されている。(巻頭の第11図参照)
恐らく、庶民の居住区内(宮城の外側。最外
外郭城内)に三つの市があり、馬市は、
そのうちの一つだったであろう。
そして、宮城内北宮に造られた陵雲台の西
方、金墉城の南、(宮城西面、南から二番目
の門である西陽門の内、御道北一里)のここ
ろに曹魏(曹魏の西明門)といた時期、
曹魏の時代当時、金市は有ったことも、
かなり確かであるように思われる。
即ち、曹魏の時代には、宮城内に一つの市
場、宮城外に三つの市場が有るだろうと想像
される。(巻頭の第9図参照)
だが、後国の世王卑彌呼が曹魏に朝貢した
二、三千年、すでに建春門外で馬市が営
まれ、
今後の研究を待ちたい。

参考迄ながら

《日本の平城京内には、三つでなく

二つの官営の市場があった

という。平城京の東西の市について

こう述べられている。

〔奈良の〕都の建設前には、東北から西

南に流れる佐保川と、西北から東南に流れる

秋篠川があった（※沼に注いでいたのだろう）その後佐保

川は左京三坊、秋篠川は右京二坊の線に沿

って真南へ流れるように変更された。そして佐

保川沿いに東市が、秋篠川沿いに西市が設け

られた。

東市も西市も完全な官営の市場で、東西の

市司による監視の目が光っていた。一日から

一五日までは左京の東市、一六日から右京

の西市が、正午の太鼓を合図に開き、日没前

の太鼓を合図に閉められた。

人と物の集まる市は、その社会の縮図だっ

た。日本霊異記には、その混雑の中で経

この頁 17行 「いずれにせよ」 第26回 日本書紀に247? 149「てちあひ」 第28回 買広482 1000文を1貫とた

「逆」字
「」字

1176

字アキ

天つち改行

参照) 曹魏の洛陽城を模した都城が倭国に作ら
た当初(三世紀半ばころ) 東西の市場(および馬市に相当する市場の
合計三つの市場があったのか
(2) それとも東西の二つの市場(のなかたのか
など、現在の時点では判断出来ない
ともあれ、平城の都において、馬市
に相当する所が平城宮内に取り込まれて、略
逆し字形(口状)の宮域とされたのだった。
(1) (2) のいずれにせよ、この物語では、
平城京内に設けられた東と西の二つの市
場の起りは、曹魏時代の洛陽城に遡るの
と考える。 (第6回 第9回参照)

と考える。 (第6回 第9回参照)
源 米 11月 36月 日 小町 9回 曹魏